

人文科学者の情報の要求と利用

—人文科学分野対象の調査のレビューを中心に—

The Information Needs and Uses of Scholars in the Humanities

—A Reviewing of Studies in the Humanities—

岡澤 和世

Kazuyo Okazawa

Résumé

User studies in science and technology have been being conducted for about thirty years, and user studies in the social sciences also have been growing during the last decade. However, the humanities have largely been overlooked. Why is this?

Schuller suggests that if information is classified along a linear spectrum from discrete “units of information” to ideology in humanities most information is grouped in the middle of the spectrum round “argument and interpretation”. It has also been suggested that scholars in the humanities have research methods and information needs which are entirely different from those of their counterparts in the sciences and social sciences. To what extent are these suggestions true? Do we really know, other than by impressions built up over a period of years, what’s the needs of scholars in the humanities are and what information system might be most useful for such scholars?

There have been a few studies made in the humanities. The purpose of this paper is to review these studies made in the humanities and to determine whether they might be used to aid in the development and improvement of library service and information systems scholars in the humanities.

These studies include citation studies and use studies. Citation studies have covered a limited number of subject over a brief period of the time and with a small sample. User studies are also limited, but some reveal information about the character of humanities literature and the information needs and habits of humanites scholars.

This paper reports the results of these studies and compares them and survey and with some assumptions. I think it is time these assumptions were tested according to humanists scholars’s information needs. In addition, it is important to review the results of previous studies made in the humanities.

岡澤和世：慶應義塾大学図書館・情報学科講師，東京都港区三田 2-15-45

Kazuyo Okazawa, School of Library and Information Science, Keio University, 2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo.

- I. はじめに
- II. 人文科学と人文科学者
 - A. 人文科学の範囲
 - B. 人文科学者
 - C. 人文科学者の情報利用の仮説
 - D. 調査の段階
- III. これまでの人文科学を対象にした研究のレビュー
 - A. Bebout, L. のレビュー
 - B. Clyve, J. らの“歴史学者によって使われる文献の特徴”の調査
 - C. Stieg, M. F. の“歴史学者の要求する情報”の調査
 - D. CRUS の調査結果
- IV. 考察

I. はじめに

人文科学研究に関する情報の蓄積はその学問の特徴から考えて難しいと言われている。人文科学はソフトの科学であり、情報蓄積の対象となりうるデータはハードなものでなければならない。人文科学にもハードなデータがあるかもしれないが、それを発見するメカニズムが存在しない。

人文科学にはこの名の下に実にさまざまな分野が含まれている。この分野の散漫さは研究者共同体としての結束力を持たず、その共同集団である人文科学者の範囲は他の分野に比してきわめて多彩で広い。

人文科学者はコンピュータによる文献検索からも、人文科学者の要求を明らかにしようとする user study からも見放されてきた。研究者自身にもコンピュータ志向の研究に対する強い不信感がある。

しかし、人文科学にも新しい波がおしよせている。認識、解釈の科学と考えられてきた人文科学の中にもコンピュータ志向の研究が行われはじめている。新しいテクノロジーを避けたり非難しているだけではこれからの研究はやっていけないとさえ言われている。

しかし、このような風潮の中で、実際の人文科学研究者はどのように研究を行っているのだろうか。この論文は、近年行われた人文科学者を対象にした一連の研究をもとに、人文科学者の情報要求と利用の特色を明らかにしようとするものである。

II. 人文科学と人文科学者

人文科学というあいまいな標目のもとに実に多くの分

野が含まれている。社会科学との境界線もあいまいで、ある分野は人文科学に分類されたり社会科学に分類されたりする。人文科学に何を含めるかは国や大学によっても異なる。何が人文科学に入るかを論じる事はこの節の主旨ではないので詳しく述べることはさけるが、論を進めていく上で一応定義を試みておこうと思う。

A. 人文科学の範囲

Schuller は、学問分野で使われる情報を発見から純粹理論、イデオロギーへと流れていく線形のスペクトルとしてとらえるならば、人文科学で使われる情報は丁度中央に位置する“議論と解釈”の周辺に群がっていると述べている¹⁾。

これまでに行われた調査にも明確な範囲の定義を行っているものは少ない。その中からいくつかの例をあげてみると、社会科学を対象に調査を行った Bath 大学図書館の INFROSS (Investigation into Information Requirements of Social Sciences)²⁾ では社会科学として経済学、教育学、政治学、心理学、社会学、歴史、地理学、人類学、統計/数学、その他をあげている。

Sheffield 大学にある user study のセンターである CRUS での人文科学研究³⁾では人文科学のすべての分野を網羅して調査する意図のないことを明記している。CRUS の調査対象となっている人文科学は5領域 (English, French, 歴史, 音楽, 哲学) である。これらの領域は人文科学の代表的な領域であると述べられている。

INFROSS の後に Bath 大学で行われた DISISS (Design of Information Systems in the Social Sci-

ence) のプロジェクトで調査した人文科学の雑誌数調査のところでは (*Ulrich Periodical Directory* による) 次のような領域と雑誌数があがっている⁴⁾。

美術 (art) の標目: 670タイトル

古典 (classical study): 76タイトル

人文一般: 230タイトル

言語学: 591タイトル

音楽: 692タイトル

哲学: 438タイトル

宗教・神学: 2,555タイトル

Bath 大学では歴史を社会科学と考えており、CRUS では歴史を人文科学に入れている。CRUS では歴史を報告書の主要テーマとして多側面から論究している。

B. 人文科学者

人文科学者の範囲の決定はさらに難しい。CRUS の場合は調査対象者を Sheffield 大学の教員と Ph. D. の院生に限定している。INFROSS では社会科学者を選び出すのに非常な努力を払っている。社会科学者と社会科学の情報利用者を明らかにすることを目的にしているからである。

INFROSS の社会科学者抽出法を少し詳しく追ってみると、まず

大学の教員は *Commonwealth University Yearbook* をもとに選び出している。

大学以外の社会科学研究者は *Scientific Research in British Universities and Colleges vol. 3- Social Science*, *SSRC Annual Report* からであった。

教育学研究者の決定は SRBUC から除外されているのでさらに難しく、National Foundation for Educational Research の会員名簿の最新版から抜き出している。主要な社会科学以外、例えば歴史と統計学は、歴史を経済学、政治学の大学の学部から、統計学はさまざまな分野から第一関心対象を統計学におく研究者を選んでいる。それ故、歴史といっても経済史、政治史であることを明記しておく必要がある。

人文科学者の決定もこのような方法で決定できるはずであるが例がない。

現在、実際に調査を計画している我々のプロジェクトでも、日本の人文科学者を決定するためにさまざまな方法が使用されている。しかし、明確な学問領域の決定、人文科学者の決定はできていない。調査対象者を把握できないのである。そのために、現在我々が行う予定の調査はまず、サンプルを選択する段階で多くの困難に直面

してしまったのである。その原因はいくつかあげられるけれども、最も根本的なことは、英国に比べてこの種の資料が不十分であるといえよう。

人文関係専門団体の会員リストなどの版が古く、故人が含まれていたり、学会によっては会員名簿が古かったり、無かったり、所属が誤りであったり、専門が不明確であったりした。

C. 人文科学者の情報利用の仮説

これまで多くの user study (情報利用者研究) が行われてきたが、人文科学の場合、ほとんど無視されてきた。この背景にはさまざまな理由が考えられるが、user study の発生の理由からすれば当然と言えるかもしれない。また既に述べたように、データの蓄積という点からみて人文科学には難しい点が多すぎるということも指摘できよう。

しかし、大学中央図書館の最大の利用者はおそらく人文科学者であり、また、大学図書館などの組織化は彼ら向けに出来ているのではないだろうか。すなわち、第1の仮説は“人文科学研究者も非常によく図書館を利用する”ということである。

大学中央図書館の蔵書構成を見ると、特殊な場合を除いて圧倒的に図書が多い。これは勿論、館によっても、館の目的からいっても多少の差はあるけれども、こういって過言ではあるまい。それは図書館の主な機能の一つがドキュメントの蓄積にあるからである。

ところが、人文科学者は雑誌よりも図書をよく利用し、非常に多様な資料を必要とする。また図書館でのブラウジング活動は人文科学者にとって重要な研究活動であると言われている。また、人文科学者は新しい資料に対してそれ程、高い優先順位を置かず、古い資料もそれと同じ位重要であると認めていると言われている。このような情報要求を満たすためには図書館に頼らざるを得ないはずである。

仮説の第2は、“人文科学研究者は、自分の研究にとって適合した資料が何かを見つける時、それを他人に委託できないと感じている”ことである。彼らはそれを他の分野の研究者よりも主要な研究活動の一部ととらえているように思われる。資料の発見は単に情報蓄積メディアの提供以上のものである。

仮説の第3は、人文科学にははっきりした形の「見えざる大学」は存在しないのではないかという仮説である。もし存在しないとすれば、彼らはこの経路から得る情報を何処から得るのであろうか。

もしあれば、どの位の価値を彼らはそれに置いているのであろうか。

第4の仮説は人文科学者は二次資料を使わないことである。これは社会科学よりもよりその傾向が強いように思われる。では何故それらは使われないのであろうか。

第5の仮説は人文科学者の研究法の特殊性を基にした仮説である。彼らには他分野とは全く違った研究手順があり、特殊な研究環境が存在しているのではないかという仮説である。

この5つの仮説はさらに多くの問題の突破口となるように思われる。例えば、人文科学の二次資料は彼らの研究に適しているのか、その充実度、正確さはどうなのか。また、資料へのアクセスはどのように行われているのか。特殊資料にはどんなものがあるのか、それらはどのような経路を経て入手できるのか。もし入手困難であればどのような改善が可能なのか、この他にもいろいろな派生的問題が考えられよう。そしてこれらはすべて未だに推測域にとどまっているのである。

D. 調査の段階

CRUS では人文科学研究を1975年から開始して現在1983年も継続して行っている。かくも長期的な計画を実行する理由は、人文科学の持つ難しさと、これまでの user study の反省からきているように思われる。まず面接を行い、次に2つの質問紙法による調査を実施し、そこから提起された問題をさらに5年かけて研究、調査し、その間に問題になった事柄を定期的な集会でとりあげ議論している。この調査の最終報告は未だ公表されていないが、その進展ぶりは CRUS の *News Letters* で知ることができる。

こうした経過からみて、我が国の人文科学者を対象にした調査も短期間にいそいで結果を出す方法をとらず、長期的に行う必要があるように思われる。また、これまでの user study で使われてきた方法は人文科学者を対象にした場合には不適當であるように思われる。今回の発表は大規模な人文科学者の user study の出発点ともいえるもので、引き続き我が国の人文科学者を対象にした調査を実施していく予定である。

人文科学調査は数は少ないけれども全くないわけではない。そこでまず初めにこれまで行われた調査を捜し出して、レビューを行い、これまでの結果を統合しておく必要があるように思われた。

また、日本の場合、日本独自の研究環境があるため、その辺の事情も明らかにしない前に調査を実施しても、

実りのある結果は得られないように思われる。以上が、今回の発表までに調査を実施しなかった主な理由である。

II. これまでの人文科学を対象にした研究のレビュー

科学と工学を対象にした利用者研究は約30年の歴史を持っている。また社会科学に対するものも約20年の歴史を持っている。しかし人文科学はこうした流れの中で常に無視されてきた。その理由はいくつか挙げることができるが、図書館の利用という観点から考えると、人文科学者の利用頻度は他の分野の研究者に比べても相当に高いように思われる。

ここでは、人文科学を対象にした少数のこれまでの研究調査のレビューを行う。その目的は人文科学者の情報システムや図書館サービスを発展、改善するための指針を得るためであり、今後の調査の基盤とするためである。

A. Bebout, L. のレビュー⁵⁾

Bebout, L. らは1975年までに行われた人文科学を対象にした引用文献分析研究(citation study)を第1表のようにまとめている。

第1表 人文科学における引用研究

研究者名と分野	使用雑誌	引用研究数	収録期間
Gleaves アメリカ文学	5	2,541	1948-58
Bolles アメリカ文学	1	?	?
Broadus 会話 (speech)	4	1,710	1912-21 1929-21 1939-41 1949-51
Tubker 哲学	1	1,327	1956-57
Vangham 音楽	2	1,163	1953-56 1955-58
Simonton 美術	6	3,058	1948-57

また、これらの研究からの結果は第2表のように要約されている。

引用文献分析研究以外の研究で人文科学を対象にした研究として彼らは以下のような研究を提示している。

(1) Price の利用雑誌の調査⁶⁾ (1970年)

Price の研究で使われている人文科学系の雑誌は17誌で、分野は哲学、英文学、美術、美学、言語学、音楽、米文学、宗教など10分野である。Price は“hard science”度を測定する値 Price's index を各雑誌に対し

第2表 人文科学の引用研究の諸結果

	引用された文献の形態			10年以内のもの(%)		使用された外国語文献
	図書	雑誌	その他	雑誌	図書	
Claves	49.9	34.7	15.4	19.6%	24.5%	2.6%
Broadus	47.9	45.7	6.5	16.3	15.8	7.9
Tucker	54.8	28.5	16.7	11.9	14.3	54.4
Vaugham	69.5	25.3	5.2	40.8	19.5	42.7
Simonton	71.4	28.6	—	—	—	79.5
	(16年以内で 22.8%)					

て出しているが、彼の考えた“hard science”43以上に匹敵する雑誌は人文科学には1誌もない。17誌の中で最も高い値を持っている雑誌は“Art Journal”と“Journal of American Academy of Religion”の38である。これに対して最も低いのは“American Literature”である。

Price のこの調査の対象となっている人文科学の雑誌はサンプル数として非常に少ない。この結果から多くの事は語りえないが、人文科学雑誌の利用の特色を伺うことができよう。

(2) Lilian Middleswart の Chicago 大学図書館の図書の利用調査⁷⁾ (1964年)

彼女は当大学図書館で貸り出されたことのない図書の比率を調査した。その結果、哲学—36%、文学—27%であった。

(3) Trueswell の Northwestern 大学での調査⁸⁾ (1965年)

人文科学と社会科学研究者の貸出し要求の99%以上が、当大学図書館蔵書のわずかに40%で満されていたという結果を提起している。

(4) Fussler と Simon の調査⁹⁾ (1969年)

研究図書館の図書の利用パターンを調べた Fussler たちの調査結果では特殊語 (Teutonic language) や文学のある分野では各蔵書の約25%が、過去100年以上も、1回も使われたことがないことが明らかになった。

(5) Hutchins らの調査¹⁰⁾ (1971年)

外国語の文献利用状況を言語の問題から論じた Hutchins らの研究は Sheffield 大学のさまざまな記録—貸し出し記録、複写記録、相互貸借、図書館での雑誌の利用記録—などを調べることに、引用件数を数えるという二方法を使って行われている。その結果によると、人文科学者は他の主題領域の利用者よりも外国語文献の利用

が高く、またよく引用している。中でも仏語の利用が高い、と述べている。さらに人文科学者は雑誌よりも図書をよく利用するという結果も出ている。

(6) Palmour らの大学図書館における相互貸借制度の調査¹¹⁾ (1972年)

彼らは回答のあった71館の大学図書館を対象に相互貸借の件数1,900件の文献要求を分析した。その結果、人文科学の文献要求の最も多い年代は1900年～1960年の間で、全文献要求の49.1%であった。社会科学でもこの年代のものが最大部分を占め38.2%と高率である。これに対して、科学技術の文献要求は1961～年1968年のものが40.8%と最も多かった。人文科学者が要求する文献の言語は圧倒的に英語が多く、次いで独語、仏語、スペイン語、イタリア語の出版物であった。一方、露語文献は自然科学者によく要求されていた。

人文科学において、その文献要求の25%が雑誌、58%が図書、5%が学位論文、その他の資料が10%であった。

(7) Stevens の研究¹²⁾ (1953年)

研究方法や文献利用における主題の特性について論じた彼の研究は、人文科学を研究している人たちがどんな情報要求を持っているかを理解する上でおおいに役立っている。彼は各主題の文献のもつ特性を明らかにしようとし、次のような結論に達している。

①社会・人文科学者の使う文献は、主題に関して分散が広く、さまざまな出版物にあらわれる。

②社会・人文科学文献の寿命は比較的長い。

③一方、科学技術の文献は特定の数誌に論文が集中しており、ごく最近の数年間の寿命しかない。

(8) Stevens の調査¹³⁾ (1953年)

もう一つの彼の研究は博士論文研究に使われた図書館資料を調べ各主題の特色を、より明快にしようとしてい

人文科学者の情報の要求と利用

第3表 情報探索行動の一般プロフィール

行 動	自然科学者	社会科学者	人文科学の研究者
情報源	最も有用な情報源は雑誌と商業出版物、ハンドブック インフォーマルなコンタクトは価値がある	モノグラフと雑誌をかなり良く使う インフォーマルな個人的接触は価値がある	図書の方が雑誌よりよく使われる。インフォーマルな個人的接触は価値がある 古い資料も社会科学や科学の場合よりも重要
レファレンスを見つける方法	順位：個人の推せん、偶然の機会、抄録索引が最も良く利用される方法。図書館情報部門は重要でない。	順位：引用文献、抄録/索引、人からの推せんが最も利用される方法。図書館情報部門は重要でない。	順位：索引、個人の推せん、偶然の機会。図書館の利用は重要
抄録誌の利用と機能	科学者は社会科学者に比べ僅かに利用が低いが、同程度にカレント・アウェアネスにそれらを使う。		人文科学では利用できる抄録誌がほとんどない。 カレント・アウェアネスに使う
会議出席とその評価	両方とも同じ位出席する 純粋科学者は、社交的接触から情報を入手、応用科学者は提出論文から情報を得る	主に社交的接触と提出論文から情報を得る	会議には出席する 社交的接触からと情報入手提出論文はほとんど価値がない
文献探索の委託	探索を委せる傾向がある	自分で探索する傾向がある	自分で探索を行う傾向がある
情報の遅れに対しは	発見の遅れの経験はある程度ある		発見の遅れの経験がある
外国語能力	言語能力と言語上の障害について気付いている度合は、社会科学者よりも科学者の方が高い		言語能力は科学者、社会科学者よりも高い
研究/アイデアの刺激	記述資料、自分の研究、インフォーマルな個人的接触が社会科学者、自然科学者にとっても重要		同 じ

る。科学技術の研究では比較的少数の雑誌が良く使われるのに対して、人文科学の研究には複数の雑誌が必要であり、時にはほとんど使われたことのない雑誌さえ必要になる。

(8) Hale の調査¹⁴⁾

質問紙10通、面接10件という小さいサンプルからの結果ではあるが、人文科学者の二次資料についての関心を知る数少ない研究の一つである。その報告によると、人文科学者は主題書誌をよく利用し、社会科学者は抄録誌やカレントな書誌をよく使うという。

Bebout は以上のような人文科学を対象にした調査をレビューして E. S. Kelton¹⁵⁾ の示した表を使って、第3表のような仮説を立てている。

B. Clyve, J. らの「歴史学者によって使われる文献の特徴」の調査¹⁶⁾

この調査の目的は歴史学者によって使われる資料の性質を見つけることであった。

調査方法はレファレンス分析。彼らはレファレンスとサイテーションを区別して使っている。彼らの定義によるとサイテーションとは脚注である研究が引用された機会 (occasion) を意味するのに対して、レファレンスとは引用された実際の研究をさすという。引用分析は各サイテーション毎に回数を数え加算していくが、レファレンス分析は引用された研究を1回だけ記録していく。

この方法の限界は先駆者である Gross & Gross の1927年の研究の時と少しも変わっておらず「読んだのに引用しなかったり、引用してあるものが必ずしも実際に読まれたとは限らない」点にある。しかし、他の方法に比べて短期間で処理でき、分析ソースが簡単に利用できる、結果の解釈も容易であるという利点がある。

レファレンス分析の対象分野は英国史 (English history) で時代を ①中世、②現代初期、③現代後期に三区分別し、各文献の違いを明らかにしようとしている。

レファレンス分析の対象形態は学術雑誌にかぎり、英

国史分野で著名な雑誌7誌を選び、1968年、1969年の2年間を対象にしている。対象論文は英国の歴史に関する論文とし、7,127件のレファレンスを抽出し、各レファレンスについて次の項目を分析している。

- ①出版物か未出版物か
- ②資料形態
- ③出版場所
- ④言語
- ⑤出版年

⑥ 標 題 } 分析とは直接関係ないが書き添えている。
⑦ 著者名 }

調査結果：(1) 資料の形態別分布

出版物 - 87.4%, 未出版物 - 12.6%

未出版物の中で最も多かったのは手書き資料 (10.9%) で、なかでも中世は平均よりもこの形態への利用が高い (18.4%)。

出版物の中で最もよく使われているのは図書で 34.1%, 現代初期はさらに高く 38.0% を占めている。

不定期と定期刊行物との比較においては、定期刊行物の方が高く (59.8%), 雑誌 (平均21.5%) は現代後期の場合はよく利用されている (27.3%)。

歴史研究者の主要な情報源はアーカイバルな記録物であり、過去を再び構築するのがその主な目的であるにもかかわらず、手書き資料への依存度が低いことを意外と思うかもしれないと指摘し、その原因をレファレンスの数の計算によるかもしれないと述べている。

手書き資料の利用場所は Public Record Office と British Museum で全体の利用の 55% をカバーしていた。約 30% が大学や大きな大学図書館、4.4% が個人所有、5.5% が海外のアーカイブと分散している。

手書き資料の 70.7% は中世史に集中している。学位論文の利用の低い理由は入手が困難であることと、もしそれらが重要であれば、いずれは出版されるであろうと一般に考えているためと指摘している。

出版物の中で特に興味のあるのは現代後期になると利用する資料形態が多様化することである。議会の議事録、新聞、政府出版物などが増えている。

歴史研究者は図書をよく使うが、現代後期は雑誌の利用が高くなっている。これは現在の情報源資料が新聞や雑誌にも分散してきたことを示している。

(2) 雑誌名分布

これまでの調査結果では、主要な文献に多くの読者の利用が集中する、いわゆる 80/20 ルールがあると

言われている。これは要求の 80% が蔵書の 20% によって満たされるというルールである。この調査では 3 つの時代研究の最頻度引用雑誌をリストし、各雑誌の特色を明らかにしている。3 研究共通してよく使われる雑誌はなく、80/20 ルールよりも 75/25 比率であることが明らかにされた。

(3) 出版場所

分析結果は 86% が英国。国外出版物は 1 位米国、2 位フランス、3 位ドイツであった。

(4) 言語

外国語は 7.7% でラテン語が 3.3%, フランス語が 2.5%, ドイツ語が 1.2%, その他 0.7% であった。しかし、中世史は外国語が 28.4% と高く、ラテン語がその半数であった。

(5) 時代分布

1970年から10年毎に1900年までを7区分、1900年からは50年区切りで1800年以前と3区分計10区分のレファレンスの数を3つの研究を対象に調べている。思ったとおり、歴史研究者にとってはかなりの長期にわたる年代の出版物が重要であることがわかる。レファレンスの数は1969年から少しずつ減少している。しかし、3つの研究領域の中にはある時代の出版が特に多く使われているところもある。

歴史研究者は広い範囲にわたる時代の印刷物をよく利用しているが、それでも最近出版された印刷物もよく使う。特に現代後期研究の場合は新聞、雑誌、メモ類などを使う。3つの研究に共通しているのは、最もよく利用される重要な印刷文献が図書と雑誌であることである。また、平均引用年齢 (median citation age) は研究領域によってかなり違っていた。現代後期が71年、現代初期が54年、中世が39年であった。

Clyve らは以上のような結果から次のような結論を導き出している。

まず、この結果をこれまでの結果と比較しようとした場合、方法論が違うので単純に比較できないとしながらも、文献利用全体のパターンについておおまかな結論を引き出せると述べている。結果の比較の中でも、引用された資料形態の分布の比較が一番難しく、人によって “book”, “monograph”, “serial”, “periodical”, “report” のような用語の使い方、解釈が違っているのがその主な理由であるとしている。

第4表は彼らがこれまでの研究結果をもとに作成した形態分布の表である。これによると、米国史と英国史は手書き資料の利用がほぼ等しい。しかし、図書と雑誌の

人文科学者の情報の要求と利用

第4表 形態別による分散の比較¹⁷⁾

主 題	図 書	形態別の資料の%	
		雑 誌	手書き 文 書
美 術	71.4	—	—
音 楽	69.5	—	—
米 国 史	45.6	9.2	10.3
英 国 史	34.1	21.5	10.9
社会科学一般	46.0	29.0	3.0
社 会 学	45~56	33~40	—
科 学 一 般	12.0	81.0	—
化 学	5.2	92.7	—

利用においては違いがある。英国史は米国史より雑誌をよく使い、米国史は英国史より図書をよく使う。

社会科学と比較すると、歴史は社会科学ほどには雑誌を使っていない。このような結果から、Clyveらは歴史を人文科学と社会科学の接点と考えている。他の人文科学ほど図書へのレファレンスは多くなく、社会科学ほど雑誌のレファレンスが少なくない。

人文科学が社会科学と異なるもう一つの大きな相違点は、海外文献の利用である。この調査結果では86%が自国のものであり、14%だけが海外の文献であった。米国史を調べた調査では4.2%しか海外資料は使われていなかった。社会科学の場合は50~60%が自国の文献であるという結果が Earle や Vickery によって明らかにされている¹⁷⁾。

英国史は、利用される言語について言えば社会科学に似ている。この調査の結果では外国語が7.7%であったが、Vickery らの調査では10%が外国語であった。ただしこれは今回の英国史だけにいえる結果であって、他国の歴史を対象にした研究分野では当然その国の文献が多くなるように思われる。

時代分布の点からいえば英国史は他の人文科学に近い。社会科学は歴史よりも狭い時代にかぎられている。特に20世紀に集中している。自然科学はごく最近の開発に関心があり、古い文献はほとんど使われない。第5表は10年以内に出版された文献をどの位各分野が使ったかを比較した表である。物理学では88.2%が研究時点の10年以内に出版された文献を使っていたのに対して、英国史の現代後期では13.8%しか使われていない。これはいかに歴史研究者が古い文献を使うかを如実に示している一例である。

第5表 時代分布の比較

主 題	研究を行った時点で10年以内に出版されたレファレンスの%
物 理	88.2
社 会 学	80.0
化 学	71.2
社 会 学	69.9
社 会 学	69.6
社 会 学	57.0
経 営 学	56.2
社 会 学	50.0
政 治 学	47.6
経 済 学	45.0
哲 学	34.9
音 楽	25.5
現代英史前期	22.8
アメリカ史	21.6
中世英史	17.4
現代英史後期	13.8

Price は、hard science を測定する指標として、最近出版された資料への引用の集中度をあげ、soft science, non-science はアーカイバルな文献への依存度が高いことを指摘した⁶⁾。彼の指標（すなわち5年以内に出版された文献にレファレンスの43%が相当していれば hard science, 42~21% で soft science, 21% 以下では non-science という指標）に従えば、英国史は non-science であると言える。

雑誌の平均引用年齢の比較も Price の指標と同じように、各分野の特徴の類似性を表わしている。社会科学の平均引用年齢は6年（Vickery らの調査）であった。これに対して英国史は現代前期で10.5年であった。

この調査の最後のところで、Clyveらは歴史研究者の利用文献の特色を図書館サービスとの関係からみて、次のように述べている。

①歴史研究者の使う資料は種類が多い。それ故に、一つの図書館で彼らの利用要求をすべて満たすことは難しい。解決策として、図書館相互貸借制度の利用、British Library の充実化、コピーの利用などがあげられている。

②コア・ジャーナルへの依存度はかなり高い。大学図書館や専門図書館はこうした主要な雑誌を揃えておき、残りは相互貸借システムを利用するとよい。そのためには書誌調整が必要である。

③最近出版された資料への依存度が高い。これまで不要と考えられていたカレント・アウェアネス・サービスの使用可能性もあることが示唆されている。

④研究の重複は自然科学ほど多くない。

⑤図書館員の能力を信用していない。これは現在の図書館から自分たちが要求するサービスを受けていないと感じているためであり、この状況を救済する方法は利用者の要求を知る調査を実施することであり、その結果を日々の図書館活動に生かしていくことである、と指摘し、人文科学での利用者の情報要求調査の実施を期待している。

C. Stieg, M. F. の“歴史学者の要求する情報”の調査¹⁸⁾

この調査はさまざまな歴史分野で研究している歴史研究者の情報要求を調べた結果の報告である。

まず、彼女はこれまでの情報要求調査でよく使われてきた方法として、情報利用者研究 (user study) と引用文献分析研究 (citation study) をとりあげ、各調査の限界を指摘している。彼女の定義によれば、引用分析は執筆者が実際に使った資料の分析であり、利用者研究は情報消費者の情報要求に関する印象の報告であるという。引用分析は実際に引用した資料の分析であるが、使用した情報のごく一部にすぎない。また、引用分析では使用した資料の相対的重要性はわからない。一方、利用者調査の方は、個人の記憶に頼っているため誤りにつながる公算が大きい。いずれの方法にしても、研究者が既に発見したものを研究するという限界を持っている。彼らは見つけたものだけを使って研究するかもしれない。見つけたものは見つけなければならないものと同じとはかぎらない。

歴史に関連した調査として、以下のものがある。

①Bath 大学の社会科学を対象にした調査¹⁹⁾ の中に歴史が含まれている。

②Sheffield 大学の人文科学を対象にした調査²⁰⁾。ここに歴史が含まれている。

③アメリカの Joint Committee on Bibliographical Service to History は書誌と歴史研究者との関係について小規模の調査を行っている¹⁹⁾。

④Illinois 大学の社会科学者を対象に情報パターンを調べた一連の利用調査²⁰⁾はかなり違った観点からこの例を扱っている。

⑤Robert N. Broadus の調査²¹⁾
社会科学の文献に関して引用文献分析の手法を使ってそ

の特色を明らかにしている。

彼はこの論文で、④主題分野、⑤主要言語、⑥出版形態、⑦年代、を変数にとりその数と各比率を出している。

彼が対象として選んだ社会科学の分野は、政治学、経済学、社会学、商学、教育学でこの中には歴史が含まれていない。

⑥Bedout, L. の調査²⁾

これは既に 1. の項目でとりあげた調査であるが、歴史はこの中から除かれている。彼は歴史を社会科学と考えている。

彼女は、社会科学、人文科学のこれまでの調査例を列挙し、歴史に焦点を合わせた調査が少ないことを指摘している。

彼女の調査は *Directory of American Scholars* にリストされている 767 人の歴史研究者に質問紙を送付する user study の方法を採用している。質問の目的は主として雑誌に対する歴史研究者の利用と態度に焦点を合わせ、質問項目は Bath 大学で社会科学者を対象にした調査 (INFROSS)¹⁾ で使われた質問票の問いの多くをそのまま採用している。そしてその理由として、INFROSS の調査結果と比較できるという利点をあげている。

調査の回答率は約 50% であった。

回答者の専門分野は 22 の研究領域に分散している。主な領域はアメリカ関係 (190 人)、英国 (21 人)、ラテンアメリカ (19 人)、中世 (19 人) であった。

調査対象の研究者の所属機関は大学が最も多く、研究所、政府機関などはわずかであった。

回答者と無回答者を比較した場合、専門領域と所属機関については、特に大きな違いはなかったが、年齢においてははっきりした違いがでている。若い歴史研究者ほど回答率が高いということである。31~40 歳—30.2% (無回答 17%)、41~50 歳—31.1% (無回答 26.3%)、50 歳以上—36.6% (無回答 56.7%)。

また、回答者と無回答者のグループの生産性を調べた結果、回答者の方が幾分高かった。2 冊以上の著書と 5 篇の論文を基準にすると、回答者の 50.4% がその資格保有者であるのに対して、無回答者は 44.1% がその資格保有者であった。

彼女はこの違いが調査結果にどのような影響を与えるのかを明記できないけれども、若い歴史研究者ほどより活発な図書館利用者であり、図書館教育や、書誌や二次資料についての教育をより多く受ける機会があったため

人文科学者の情報の要求と利用

と指摘している。また、彼らの高い生産性と比較的年齢が低いという二つの矛盾を、回答者が図書館利用をよくするためと考えている。若い歴史研究者は学者としての道を切り開く手段として出版を行う傾向があり、よく図書館を使うというのである。

この関心の分散は彼女によると、歴史研究者の情報探索パターンに重大な影響を与える証拠を明示しているという。歴史はその研究方法以外に、何ら共通の関心事のない複数の研究領域からなる学問の総称にすぎない。歴史学の位置は不明確であり、また、どんな学問にも歴史的側面といわれる領域があるため、当然のことながら、探索範囲は広がる。この種の論文は専門分野の雑誌だけでなく、広く一般誌にも、地方雑誌にも教会や宗教雑誌にも載る。従ってその探索には、時には一般向けの娯楽雑誌でさえ対象としなければならない。一般に歴史研究者が探索すべき範囲は次の4つの方向である。①学術的な歴史出版物をリストしてある書誌や索引、②地方の歴史を収載している書誌、索引、③教会資料に焦点を合わせた書誌や索引、④一般向け、非学術的な逐次刊行物のために使われる書誌や索引。雑誌は図書の場合と同様に、かえって多くの問題を抱えている。

第6表は、歴史研究者がよく使う資料を物理的形態別に表示したものである。この表では Bath 大学の結果¹⁾と Stieg の調査結果¹⁸⁾を比較例として提示している。ここでは回答者がよく使うものから順に番号をつけてく

れるように求めている(5段階)。それから使いやすいものと使いにくいものを各2つずつ選んでもらい、使いにくい理由も併記してもらっている。

その結果、ニュー・メディアの利用が全般的に低く、美術史と音楽史を除いて歴史研究者はこの種のメディアに対して関心がかなり低い。それらが使いにくい理由については説明されていないが、使っていないためにその理由をあげられないのではないかと指摘している。マイクロフィルムについては見にくい事と装置が使いにくいことがその使われない理由にあげられている。さらに、資料と研究者の間にわりこんでくる装置への嫌悪感、マイクロ資料のリーダーが図書館にあり、館内で見なくてはならないこと、その資料を収集する上では場所をとらないという利点はあるが、使うにはいろいろ面倒なことが多いこと、マイクロ資料とその装置は分類や思考の妨げになることなどがマイクロフィルムに対する不満としてあげられている。

手書き文書は使いにくい資料形態の第2位にあげられているが、これには独特の問題がある。手書き文書はその数が限られており、時には1つしかないため、保管場所も限定される。手書き文書を収集しないまでも、見にくくためには費用と時間が必要である。この点は多くの回答者が指摘している。手書き文書は読むのが難しく、読解手引書も不十分である。また特定の手順を経なければ見ることができなかったり、国外に流出しているよう

第6表 使用資料の物理的形態

資料形態	平均利用	非常に便利	非常に不便	Bath 大学での利用順位	Stieg 調査での利用順位
逐次刊行物	4.26	251	6	3	2
図書	4.47	282	—	2	1
手書き文書 (manuscript)	3.66	28	94	1	3
研究レポート	2.16	16	28	8	7
学位論文	2.75	11	90	9.5	6.5
新聞	2.97	23	59	9.5	4
政府刊行物	2.75	21	25	6.5	6.5
マイクロコピー	2.86	17	111	14	5
地図	2.10	2	17	13	9
フィルム (絵画的性質を持ったもの)	1.37	—	30	18	12
その他のピクトリアル (例: 写真)	2.11	7	25	15	8
テープレコーディングやサウンドレコーディング	1.55	2	31	17	10
ビデオテープ	1.19	2	42	19	13
コンピュータのプリントアウト	1.51	6	37	12	11

な場合は、見に行く手続きがよりめんどうになる。マイクロフィルムによって幾分解決されているけれども入手の困難さは他の資料形態とは雲泥の差がある。

学位論文もまた入手が困難という理由で敬遠されている資料形態である。マイクロ化されることも稀なためなかなか利用されない。

新聞についても索引やガイドが不十分であるため入手が困難なものが多い。これは政府刊行物に対してもいえることである。

コンピュータはほとんどの歴史研究者が不馴れのため使用されていない。

広い範囲の資料を入手する必要がある歴史研究者にとって有効な情報入手方法は相互貸借制度であり、これは他の調査によっても実証されている。しかし、この制度に対する不満も多く、入手にいつも非常に時間がかかり、また利用に制限が多いことなどがその主な理由としてあげられている。

歴史研究者は必要な情報を見つける方法として、印刷された情報源に多くを頼っている。研究者間の非公式の情報交換活動で結成される。「見えざる大学」は発達しておらず、図書、雑誌の巻末の引用文献、参考文献が最も使用される情報源で、専門書誌、書評、図書館目録などがこれに次ぐ。これを Bath 大学の社会学者を対象にした調査と比較すると、そこでは第 2 位に所属機関の仲間とのディスカッション、第 3 位に抄録・索引があげられている。これは社会学者と異なる点である。

歴史研究者間に「見えざる大学」が発達していない理由として、彼女は(1)研究者同志が連絡を取りやすくさせるようなメカニズムがないこと、(2)カレントな情報がそれ程重要でないこと、の 2 点をあげている。カレントな情報を入手する際によく使われていた方法は、図書、雑誌、書誌といった比較的伝統的な情報源の使用にとどまっている。探索方法も体系的でなく、書評が研究のレファレンスを見つける情報源として高順位になっている。これも社会学者と非常に異なる点である(第 7 表参照)。

歴史研究者にとって図書館はそれほど有効な情報源ではなく、図書館からの助力も余り必要とされていない。しかし、これは、図書館員との接触がほとんどないためと思われる。

また、歴史研究者は、抄録や索引も使わない。これは彼らが体系的な探索をしていないことを示す一例である。このことに関しては他の Bath 大学の調査や、後述

第 7 表 有効な出版情報を見つける方法

方 法	研究に有益	カレント情報に有益	Bath 大学での順位
抄録又は索引	3.17 (5)	2.93 (5)	3
知人の専門家に相談する	2.87 (8)	2.65 (9)	2
自分の所属機関内の仲間との討論	2.6 (9)	2.7 (8)	4
その他の知人との討論や文通	3.14 (6)	3.14 (4)	6
図書館目録	3.5 (4)	2.9 (6)	8
所属機関の図書館書架の探索	3.0 (7)	2.88 (7)	10
図書館員に聞く	2.16(10)	1.90(10)	13
専門書誌	4.01 (2)	3.93 (3)	6
図書や雑誌の参考文献や引用文献	4.36 (1)	4.59 (1)	1
書 評	3.85 (3)	4.56 (3)	11

する CRUS の調査でも同じ結果がでている。彼女はこの理由を、多くの歴史研究者はこれまで抄録・索引を使ったことがなく、この種の探索ツールが有効でないと決めている人が多いためと解釈している。使用したことのある抄録・索引の明記を依頼したが、記入例はきわめて少なく、その幅も多岐にわたっている。

この質問の結果、きわめて興味深い事として、歴史研究者が学術的な文献を対象としない“Reader's Guide”をよく使うということが明らかにされた。この結果の解釈を彼女は学校図書館の指導の影響と大学図書館員の無能さに帰している。

歴史研究者がよく読む雑誌を調べた結果は彼らの読書傾向をはっきり示している。彼らがよく読む雑誌として上位にあがった雑誌は比較的限定された視野のもので、自分の関心に直接つながる情報源を利用する傾向が強いことを示している。

しかし、それと同時に、たとえ自分の専門から離れていてもより一般的な雑誌も通読するという結果も出ている。非常に専門化された雑誌だけでは歴史研究には十分でないことをこの結果は示している。これは先に指摘された、有効な文献を捜す手段として書評がよく使われているという結果からもわかることである。そして、これこそ歴史研究者にとっての情報システムの有り方を示す重要な証拠であると指摘している。

歴史学者達の抄録・索引の利用については未だ十分に

第8表 偶然に資料を見つける方法

	めったに ないか、 全くない	時々ある	よくある
図書館の書架を眺める	37	179	108
最新の雑誌にざっと目を通す	8	152	173
特別のレファレンスや何か目についたものを調べる	16	153	151
オフプリントを受け取る	171	114	31
書店の中で	184	117	22
研究仲間との会話の中で	44	201	78

有効なデータが入手できていない。彼らの二次資料の利用はかなり偶発的であり、その実情が批判される程に到っていない。もし十分に使用されていれば当然、現在の二次資料に対する不満や批判があるはずである。

歴史研究者に、現在行っている研究にとって有効な資料をたまたま見つけるような機会が何回あるのかを尋ねた結果、一人の回答者を除いてすべての回答者がそのような機会のあることを回答している。この結果が第8表である。この表で最も興味深い点は「見えざる大学」が存在していないことをはっきり示していることである。これによると、歴史研究者たちは未発達のインフォーマルなコミュニケーション・ネットワークしか持っておらず、比較的孤立した状況のもとで各自研究を行っており、彼らを結ぶ絆はない。また、その情報源を大きく印刷物に依存しているにもかかわらず、書店での偶発的発見が最下位になっている。これは学術書店の数が少なかったり、遠かったりして書店をほとんど利用していないためと解釈している。

出版物を出版後できるだけ早く入手する必要性については、歴史研究者達にとっても従来考えられていたよりは必要なことが明らかになった。

外国語の能力と外国語文献の利用に関する質問では、まず外国語文献の走査はほとんど行われていない。重要と思われる言語さえ読まれていない。例えば、アラビア語がわからない中東史家、ロシア語を読まない東欧史家などが存在する。この結果を Bath 大学の結果と比較すると、歴史研究者の58%が外国語文献を走査しておらず、社会科学者の場合はそれが65%であった。

言語の問題についてはほとんどの研究者は研究に支障をきたしておらず、自国語の文献への強い依存を示してい

る。

また、学会は大切だと考えられていなかった。

最後に、研究を行う上で起った特別な情報問題についての問いに対しては大きく2つに大別できた。一つの障害は研究者自身の問題で、研究時間と研究費の不足、言語力の不足、研究図書館が近くにないこと、必要な資料がないことなどがあげられた。もう一方は主に図書館に向けられた問題点で、分類の不適切さ、ガイドの不足、相互貸借制度の制限、物理的アクセスの悪さ、情報入手の難しさなどである。地方大学、小さい大学にはそれぞれ独自の情報問題があることはいうまでもない。

彼女は以上のような結果を、歴史を対象にしたこれまでの引用文献分析調査と比較させながら、次のような結論を導き出している。

彼女の調査では最もよく使われていた資料形態は図書であり、次いで逐次刊行物であった。これに対して、McAnally の調査では、新聞、政府刊行物の利用が高くなっている²²⁾。Colyve らの調査¹⁶⁾は、この調査結果と大きく異なるものはない。また、新聞や学位論文は利用が低かった。

Colyve らの雑誌の分散についての調査では、歴史研究者は多様な雑誌を使うにもかかわらず、従来考えられていたよりも、少数の雑誌に利用が集中していることを発見した。彼らは、雑誌要求総数の75%が引用された雑誌タイトルの25%によって満されていることを見つけた。雑誌利用の広さは研究対象の時代やタイプによって異なることも雑誌の購読パターンから確認された。

Steig は、その調査で明らかになった問題点について、どうしたら解決できるかと、今後の課題を提起している。彼女によれば、

①歴史研究者の情報態度を根本的に変えていく必要がある。彼等は自分の知っている範囲内の文献で満足し、その中で評価を行う傾向がある。有用な索引を使った経験もなく、従って、それらに対する不満もほとんどない。

②研究法のコースを設置し、その分野の書誌を歴史研究者達に教える機会を作ることが必要である。

③外国語文献の利用をもっとすすめる。

このような問題を解決するための基本的責任は図書館によって果されなければならない、と彼女は指摘している。とどのつまり、この研究結果は図書館利用について論じているのであり、図書館員の問題なのだ彼女が指摘している。図書館員以上にその館に収められている情

報源について知っている人はいないのであり、図書館利用の促進こそ、図書館の中核をなす機能であるというのが彼女の論旨である。そのためには、図書館に問題があることを認識することがまず出発点であり、歴史研究者に提供できるサービスのタイプの方法とその意義を理解し、情報探索利用の全過程に介入し、利用者が必要と考えるものの発見に力をそそぎ、伝統にとらわれずに利用者の最も使いやすい形での情報の提供を考慮すべきである、と述べている。

なお Steig は次の様な点も強調している。即ち、大学などでは少なくとも書誌的教育プログラムを設定すべきである。これが上手に教育されれば、将来の学者たちは情報源を効果的に使えるし、教授達はこの種の教育を図書館に託し、その間に研究できるという副次的な効能もあるとしている。

また、図書館の問題やその可能性を学者達に理解させるためには、選書への参加と図書館委員会への参画が考えられるとし、これは図書館員と教員との個人的接触を深めるのにも役立つと述べている。

彼女の言及はさらに厳しく、図書館員の教育問題にまで及んでいる。研究者が図書館を利用する決定要因のもう一つは、図書館員が自分たちの要求を理解できる程有能か否かということである。研究者の要求に応えうるレファレンスを行うためには、主題知識がなければならない。その主題に関する学位は不要であるが、研究者の要求を理解する能力は不可欠である。それには研究者を対象に考えた場合、その研究者の主題領域の主題背景と広い一般教育を図書館員が持っていることが望ましい。深い主題知識を持った書誌作成者が多くなってはじめて、現状の不備を打破する突破口が開かれると彼女は指摘している。

彼女の調査結果から、歴史研究者は既存の二次資料をほとんど利用してこなかったことが明らかになった。その理由としては、歴史研究者がこれらの存在を知っているかもしれないが、努力して使おうとしないのか、入手できないのか、時にはそのようなものがあることさえ知らないかもしれないという点があげられている。

最後に彼女は次のようにこの論文を結んでいる。

“理由は何であれ、最終結果は同じである。すなわち、良い図書や論文が出版されなければそれに比例して良い教育は減るということである。即ち知識が被害を蒙るのである”。

D. CRUS の調査結果²⁸⁾

British Library Research and Development Department (BLRDD) によって Sheffield 大学の Center for Research on User Study (CRUS) の援助のもとに組織化された人文科学の研究セミナーが1985年3月28日～30日にわたってシェフィールドのホテルで開かれた。

その報告書は、A. J. Meadows がはじめの箇所では指摘しているように、5年前に行われた「人文科学における情報問題」のセミナーに続く第2弾である。その時、「人文科学にはその学問独自の特別な情報問題があるのではないか、そしてそれは自然科学や社会科学の抱えている問題とは異なるのではないか」という点で出席者の同意が得られた。その結果、報告書 No. 2 (CRUS, occasional paper No. 2) の中で問題としてあがったいくつかの領域を調査するためにプロジェクトが生まれ、研究が開始され、現在継続中である。

しかし今回のこの報告は完成に間近い研究の中間報告であり、今後、研究を行うのに必要な方向を模索することがその主眼となっている。

(1) Meadows の序文

Meadows は序文のところで、19世紀の科学者の伝記を執筆した時の情報活動を思い起して、

- ①発見できた手書き文書のすべてを読む。
- ②オリジナルな印刷物をすべて読む。

(i) その人物についてと、(ii) その人物の生きた時代的背景についての膨大な量の二次資料を調べる (19世紀がほとんどであった。)

④その人物の子孫を捜し、彼らから口頭による思い出話を聞く。もしあれば書いたものや当時の図や表を見せよう。

⑤仲間と話し合う。特にここでは19世紀当時の一般的風潮などの時代的背景などになる時代の解釈について話し合うという段階を指摘している。

これらの情報活動は歴史研究や文学研究にとって固有の活動ではないかと彼は述べ、使用される資料を次の3つに大別している。

- (1) 一次情報源 (上述の活動の ①, ②, ④に該当)。
- (2) 二次資料 (多くは最近のものではない。③に該当)
- (3) インフォーマルなディスカッション (⑤の活動)

人文科学の広い範囲の研究を特徴づける研究方法としては、歴史的アプローチといわれる方法が良く使われることが確認された。そこで、この人文科学研究プロジェクトはこの研究方法をとる分野、すなわち、歴史的志向

人文科学者の情報の要求と利用

学問分野に焦点を合わせることに決定した。

この研究プロジェクトの主な論点である「人文科学コミュニケーションを助けるためには、どのような研究が行われるべきか」を検討していく上で2つの解答が考えられる。まず、一つは図書館員などの情報スペシャリストに研究に参加してもらい、そこで得た情報活動に関する成果を実践してもらうことによって人文科学者の研究を助けていくやり方である。もう一つの方法は人文科学研究者自身にこの解決を委ねる方法である。このプロジェクトはこの二つの解決方法を取り入れている。プロジェクトの出席者(37名)中、研究者(10人)、図書館員(4人)、研究所員(8人)、その他(CRUS 関係者)という顔ぶれがこの目的に沿ったものであることを物語っている。

多くの人文科学研究者が必要としているのはオリジナルな情報源へのアクセスである。これは個人的な要求であり、きわめて閉鎖的な要求である。このような資料をカタログ化することに対して賛否両論がある。しかし、もしシステムがオリジナル資料へのアクセスを助けてくれるとしたらどんな工夫が必要なのであろうか。そこに人文科学と機械化の問題が浮び上る。

彼らはこの問題に積極的に取り組もうとしている。しかし、人文科学者は二次資料に高いプライオリティを置いていないし、機械化の問題にも関心が薄い。大学図書館の予算の削減の被害もそう蒙っていないし、図書館に対する要求も余り多くない。

人文科学研究のための二次資料の作成やガイドに過度の努力を払うことは無意味であり、彼らの要求は研究者側から言って、①出版リストのスピードアップと、②外国語資料の収録にあると Meadows は述べている。

コミュニケーション・システムの中で最も効率が良く、利用者に馴染みの深いコミュニケーションの装置は〈人間〉である、それ故、コミュニケーション・システムの適切な場所に有能の人材を配置するのが最善の方法である。しかし、財政的問題と人的資源不足からすべての情報システムがこの方法を採用できるわけではない。そのためには人文科学者自身に態度を変えてもらう他はない。

序文の中で Meadows は、人文科学研究の今後の研究方向について、その鍵となるエレメントは小グループの活動であり、それぞれの観点から研究の部分のカバーしていくであろうと述べている。しかし、それぞれの小グループが広い範囲の討議も辞さないことが肝要であると

付け加えている。

(2) Shelling からの報告

この報告書の中では、これまでの CRUS の第一番目の研究についての結果と、進行中の各プロジェクトの活動を要約している。

まず最初の仕事は、user study の調査方法を標準化するために行われたもので、ここで提起された問題を基に、次のプロジェクトが計画されたいきざしが報告されている。イングランドとウエルズにある35校を対象に人文科学の5つの分野の研究者と大学院生(博士課程)に対して大規模な郵送による調査を実施した²⁾。

その結果、回答者は

- ①オリジナルな資料に依存しており、
- ②二次資料サービスはほとんど使われておらず、
- ③チームによる共同研究に対して強い不信感を持っており、
- ④情報スペシャリストへの文献探索委託を望まず、
- ⑤研究者たちの情報要求は不明確であり、
- ⑥かなり秘密めいた環境の中で研究を行い、
- ⑦研究方法についての議論はめったにキャンパスで行われず、
- ⑧図書館の利用は低く、図書館と教員との関係はあまり密ではない、

という結果が明らかになった。

プロジェクトはいくつかに分かれているが、その中の一つのプロジェクトの関心対象をあげてみると、

- ①利用者教育
- ②人文科学への入力は何か
- ③情報処理機能
- ④抄録・索引サービス
- ⑤図書以外の資料の使用 などである。

また、別のプロジェクトでは

- ①同一領域の出版リストの地域差(全国レベルと地域レベルのリストの差)
- ②地域のコレクションのリスト作成基準の設定
- ③研究資金の調達
- ④オンライン、機械を使った索引作成の件
- ⑤図書館に応用される技術のイノベーションの価値と評価
- ⑥図書館管理 などが主な議題である。

より効果的な情報サービスを推進するために4つの研究カテゴリーが提起されている。

- ①システムベース: 図書館や情報サービスの技術面で

の能力を改善することによって利用者の役に立つ。相互協力のカタログサービスにおいてめざましい進歩がある。オートメーション化した情報サービス、逐次刊行物のオンラインによる貸出し作業のコントロールなど労働力節約の可能性などが考察対象として提起されている。

②利用者中心の態度：これはこれまで行われてきた user study の事であり、その対象は研究者グループ、共同体、個人であり、古典的な方法が質問紙法である。しかし、単純な質問票よりも、半構造化された面接法を使用するなどより工夫をした use study を行う余地がある。user の調査は多くの形をとって行う可能性があることを示唆されている。

③蔵書に基礎を置く：このアプローチの論点は現在ある図書館の蔵書をもっと合理的に使用することにある。よりすぐれた蔵書のガイドや出版に対する要求の実現、レファレンスワークの改善などに焦点が置かれている。主に、特殊資料のナショナル・レジスター、印刷物コレクションの寿命などが調べられる。

④仲介：この原則はサービス提供の新しい形態や、図書館と大学学部との関係、その効果と評価である。仲介人の利用の意義とその問題がここでの焦点になっている。

人文科学の情報研究が継続され進展していくその基盤は人文科学研究者個人の情報問題に専念する情熱にかかっていると Shelling は述べている。

(3) Sue Stone の報告

CRUS がこの問題を取り上げる以前は人文科学研究/研究者活動や、人文科学者固有の要求及び問題を明らかにしようとする研究は皆無に等しかった。このことについては1975年に Gregynog での第1回セミナーにおいて指摘された。

その結果を要約すると、Sheffield 大学の教員と大学院生に対してインタビューが実施され、続いて2つの調査、すなわち大学院生と教員(35校。ここにはロンドンにある大学は除かれている。条件が違うためである)を対象に大がかりな郵送による質問紙法の調査と、新 Ph. D. 学生に対してもっと詳しい調査が実施された。

Stone は、こうした研究プロジェクトからの主要な結果をレビューし、これらの成果を統合し、この研究の基盤となる人文科学者達の情報要求、情報活動を明らかにすることをこの報告の目的としている。

面接は人文科学に関する研究手順、研究方法、研究の

基本的段階を理解するために行われた。これによると、人文科学者は詳しい研究計画案を持っていないが、次のようなステップがあることが明らかになった。

- ①思索をし、他の研究者とディスカッションをする
- ②既存の文献を読む
- ③オリジナルな情報源の研究とノート作成
- ④執筆の下書き
- ⑤最終下書きの手直し

面接数は少なかつたけれども、典型的な人文科学研究者の仮説モデルができた。それによると、

- ①毎年数冊の図書を買う。それは彼の専門分野にとって重要なものであり、他の研究者の研究報告を知るためである。
- ②1～2冊の雑誌を定期購読している。
- ③抄録誌を使わないが書誌は使う。
- ④通常一人で研究を行う。
- ⑤年に1～2回、自分の所属大学以外の図書館を使う。
- ⑥相互貸借制度を利用している。
- ⑦出版物の遅れはほとんど重要でなく、それを補完するものが必ずある。
- ⑧年に1回学会に出席するが、フォーマルな研究発表から利益を得ることはまずない。
- ⑨図書館を何か不吉なもの様と考えている。

上の結果はさまざまな研究領域の教員を対象にした面接の結果であったが、その時、Sheffield 大学の博士課程修了の院生との面接も行われた(36名)。結果を要約すると、

- ①Sheffield 大学の選択及びその結果利用できる資料と、指導者の影響との間には相対的關係はなかった。
- ②ほとんどの学生は第二言語を持っていた。
- ③ほとんどが単独で研究していた。
- ④分野の組合せ(例えば歴史と文学)は相互の研究に役立ち、よく行われていた。
- ⑤まわし読みや通読のための予備段階があった。読まれる論文は3つのタイプに分けられる。④ある著者に対する関心、⑥理論的ないしは歴史的、⑦テキストの批判

この他に資料に対して多くの不平不満が明らかになった。

図書館利用については

- ⑥要求される資料の範囲は、図書、雑誌、論文集、原稿、記録物、テクニカルレポート、地図、スコア、

人文科学者の情報の要求と利用

サイトレコードなど。

- ⑦抄録はたいして手助けになると考えられていなかった。
 - ⑧学生の半数以上は Sheffield 大学のコレクションに強い要求を持っていない。
 - ⑨図書館相互貸借制度はかなりよく使われていた。
 - ⑩コピーの利用が高かった。
 - ⑪Sheffield 大学図書館以外に多くの図書館や研究機関が使われていた。
 - ⑫資料入手の際の遅れは決定的に重要な事柄ではなかった。
- また図書館サービスの調査では
- ⑬図書館相互貸借サービス以外のサービスは使われていないようであった。
 - ⑭少数の学生は特に研究開始時において、文献探索に助力がほしいと述べていた。
 - ⑮図書の購入範囲は多彩であり、特にその地域の書店のみを利用するという事はなかった。

この2つの面接の結果をもとに、5つの人文科学分野(English, French, History, Music, Philosophy)の教員と Ph. D. の院生計 815 人を対象に郵送による質問紙調査を実施している。この結果は CRUS occasional paper no. 2⁹⁾ で公表されているが、ここではその要点だけを述べてことにする。

回答率は64.4%に達しており、教員は約半数、Ph. D. の院生のはほぼ全数がこの調査の対象となるかなり包括的な調査であった。(学生の回答率76%)

ここでは膨大な調査結果から特に重要な結果だけを報告しておく。

①この調査結果から、人文科学における図書館の重要性が確認された。しかし又、主題によって要求や活動にかなりの違いのあることも明らかになった。この両極は歴史と哲学の分野であった。

②人文科学者の研究方法は自分を主体に研究するが、他の研究者達との個人的な接触にもかなりの価値を置いていた。

③調べる必要のある事柄が多様で、不満ながらも図書館の相互貸借に頼らざるをえない。

④人文科学研究にとって雑誌は何号もさかのぼって調べる必要があり、古い図書であるからといって自然科学の場合のように全てすたれてしまうことはない。

⑤報告では人文科学者の3つの型の研究スタイルを明らかにしている。

④多くのテキストや資料の研究を下地にした時代遡及タイプ：分散が広く旅行が必要になる。

⑤重要事例研究、比較研究のタイプ：ここでは基本的な資料が容易に利用できるが、そのすべてを入手できるとは限らない。

⑥思索的タイプ (contemplative type)：ごく少数の容易に利用できる資料だけを必要とする。しばしば研究者個人の蔵書ですむ。

この報告では、また教員と院生との比較を行っている。

①研究の時間割は著しく異なる。

②どちらも個人の蔵書に頼っており、どちらも所属大学図書館をよく利用している。

③図書館相互貸借制度は教員より院生の方が頻繁に使っていた(教員には固有の個人的接触の網目が確立していたり、個人蔵書が多いためと判断されている)。

④レファレンスの利用態度は両グループとも似ていた。

③教員も院生もその情報収集を主として個人的なコンタクトに頼っているが、雑誌の定期購読、学会の出席は教員の方が多かった。

④教員も学生も最新情報サービスの利用は低かった。教員が最新情報を入手する一般的な方法は出版社や書店からのカタログやその他の郵便物からであった。

新 Ph. D. 学生に対しては続いて調査が行われたが、最終結果は未発表である。これは 1976 年に Ph. D. 課程に入ってきた学生とその時既に Pl. D. 課程を履習中の 11 人の院生を対象に面接法をもとに行おうとするもので、主に考古学分野を扱っている。

この中間調査結果から図書館についてのべると、

①図書館について余り知識がないこと、

②図書館の質と大学の選択とは無関係であること、

③図書館サービスをほとんど使わないこと、

④図書館相互貸借制度に伴う問題は彼らの研究にとって決定的な問題であること、また研究者は、

⑤主に一人で研究しているが、個人的つき合いも大切であると考えていること、

⑥野外調査や実物を見るための旅行の大切さは言うまでもない、

などが明らかになった。この研究では院生の研究方法(例えば資料の組織法とか、研究執筆段階、図書館を使

った研究と野外研究との関係など)がかなり詳しく報告されている。

CRUS 人文科学研究は人文科学者の情報要求やそのための活動を多側面からとらえようとしている。それは人文科学研究の特徴を明らかにするための不可欠な部分であり、今後の発展研究の方向を示すものである。人文科学はすべて同じ特徴を持っているのか、特徴によってグループ分けが可能なのか、人文科学者のモデルを開発できるのか、これらは CRUS が明らかにしなければならない領域だと述べている。

CRUS は次のような方向を設定している。

- ①相互貸借制度に焦点を合わせたプロジェクトを設定し研究を行うこと。
- ②人文科学者の情報探索行動を詳しく調べ、情報伝達過程での各段階の特徴を明らかにするために、問題が公式化される方法、研究者が要求を満たす方法を知ること。
- ③一般的な結果からケース・スタディーを組み立ててみる。
- ④入手不可能な資料の徹底調査。
- ⑤図書館に所蔵されていない主要な資料の調査。
- ⑥人文科学者の書誌的資料と、情報サービスの利用及び準備との関係。彼らがこの種の資料を使わない理由の説明。
- ⑦人文科学者によるマイクロ・フィルムとコピーの利用の調査。

この報告の後では出席者によるディスカッションのものが報告されている。

人文科学者や人文科学専攻の院生は悪い情報環境にいるかどうか、それは人文科学独自の状況かどうか、という点がまず論じられた。その結果、これは人文科学に限ったものではないという意見が多かった。しかし、人文科学のデータベースは二次資料に限定されていること、人文科学者は一次資料にもアクセスする必要があることなどが指摘された。

この議論の中で特に注目すべき事柄は、人文科学における user study を今後進める目的は、人文科学者を科学者から区別するために行うのではなく、人文科学者独自の研究の特徴の解明に置くべきだという点であった。

(4) Carole Smith の報告

歴史学における user study の問題点の報告では、歴史の特殊性がまず提起されている。歴史は人文科学の他の分野と何一つ共通点をもたない主題であると指摘して

いる。

彼は教員に的を絞る、歴史研究者が教員として歴史をどう考えているのかという点から全体像を描き出すことに努めている。まず教育面から言えば、教師は学生達が自分で考え、自分で解釈し、自分で建設的な議論を組み立てるように指導する。そのためにさまざまな資料を提供し、事実とその事実を生み出した背景を考えさせようとする。その目的は、歴史研究においては提起されるいかなる問題であろうと、全員の同意を得た正しい答えというものは存在しないのだということを学生に示すことである。教師は自分自身の興味の対象や情熱を伝えるのであって、それは強制的な教示ではない。教師は特定の主題に関して出版資料を多く読むことを望んではいない。ここに図書館との係わり方が現われてくる。教師は図書館を資料を入手する場所としてではなく、情報の処理の仕方を学生に教えるための場として引き合いに出す。しかし、図書館はこのどちらの機能も果していない。

歴史研究者の使う資料は深くて広い。特に社会文化史などの場合は、くつもの長さから人間活動のすべてが研究対象となる。このような資料を入手するためにはいくつもの図書館におもむくし、旅もいとわない。

歴史研究者は二次資料の探索さえ他人に委託することを好まない。一次資料の場合はなおさらである。過去についての彼らの質問に対しては、少々の主題知識では答えられないものが大部分である。彼らにとって必要な資料を見つけることは研究者の研究の一部であり、図書館員にはこういう歴史研究の特殊性はおそらく理解できないだろうと彼は指摘している。

但し、彼の研究対象者が Oxbridge (Oxford, Cambridge 両大学) と London 大学の教員というきわめて特権的な集団のメンバーであることを見逃すことはできない。彼らの要求はたいい満されており、研究のための情報源を探り、みつからなかった経験もこれまでほとんどなかったものと思われる。

(5) 歴史情報オフィサー: John Capman からの報告
彼の報告は、Birmingham 大学での歴史研究者の傾向を示したもので、彼らには主題の書誌についての知識はほとんどなく、それはたいした問題ではないと考えていると指摘している。

彼によれば、歴史研究者たちは情報のアクセスを得るためにかなりの程度「見えざる大学」に依存しており、うまく機能している。それがない時や壊れた時、情報オフィサーが必要となる。

人文科学者の情報の要求と利用

歴史研究の教員は「見えざる大学」の利用法と彼らの狭い研究領域での書誌的資料について、不十分なが彼らなりの知識を持っている。しかし学生はこのいずれの利用に対しても浅い経験しか持っていない。教員は学生たちが自分たちと同じように研究を行い、図書館を利用し、それらを通して必要な研究法を修得していくと考えている。しかし、大部分の学生は余りにも簡単に「本がみつからなかった」という逃げ口上に頼り、一步進んで探すための努力をしない。これは学生に対して取る教員の態度と、学生側に動機が欠けていることと、図書館の無能さによると彼は指摘している。

教員と学生、教員と図書館、学生と図書館の間というこの相互理解の欠如は歴史研究者の利用パターンと深いかわりを持っている。図書館と学部との間に密接な関係を作ろうとする努力はほとんど行われず、双方の無理解のギャップはかなり深い。たいていの歴史研究者は図書館員の主題知識に不信を抱いており、図書館学関係の研究を全く読もうとしない。利用者教育、カレントアウェアネス、シリアルと逐次刊行物の違いなど彼らにとっては何のこともやらさっぱりわからないのである。それだけでなく忙しすぎる大学図書館は彼らの誤まった概念を訂正する余裕を持っていない。

質疑応答の箇所ではまず初めに「探索の委託」の問題が論じられた。歴史研究者は探索を委託しない。その理由として、

- ①図書館員に対する信頼の欠如。
- ②利用できる探索サービスについての知識の欠如。
- ③歴史研究者の尋ねる質問の性格の特殊さ。従って図書館は彼らの質問を理解できていないこと。
- ④歴史研究者は「事実 (fact)」について複数の解釈が可能であるとしている。

などがあげられている。

質疑応答での次の議題は「歴史研究者の研究手法」である。そこでは歴史研究者は悪い習慣のまま研究を行っており、それを学生にそのまま伝達しているという示唆に対して、情報入手の主要な手がかりが必ずしも書誌的資料からとはかぎらず、インフォーマルな話合いからも来ることもあることをあげている。歴史研究者が孤立して研究を行うことが強調されすぎていること、情報の共有という意識がほとんどなく、それを測定したり観察したりするのは難しいことなどもあわせて指摘された。

CRUS の人文科学研究セミナーが、アカデミックな歴史研究者だけを対象にしていることに対して多くの批判

があった。歴史研究者は史学部だけにいるとはかぎらないこと、大学以外の研究機関での変化に対しても注意する必要があることなどがその主な指摘であった。

次に提起された問題は情報提供者の役割と権限についてであったが、そこでも多くの示唆が提起された。

(6) RILA (美術文献のためのデータベース名) について Michael Dovan の報告

彼はこの報告書の中で、美術史部門における書誌的サービスの不完全さを指摘し、美術史書誌に関する国際目録作成の経過、RILA の活動状況 (RILA の主な活動は基本的な抄録の作成と、新刊書、雑誌論文新聞記事、会議録の索引を出版すること)、RILA の仕事の内容、今後の問題点を指摘している。特に質疑応答の所では RILA を機械化できかどうかの可能性が論じられた。

(7) 新技術についての Pamela Grodden の報告

人文科学研究を行っている人々の役に立つ新技術についての報告である。主な内容は英国図書館の研究開発部 (RDD of BL) のプロジェクトについての説明、新技術の傾向、人文科学への応用の可能性とその利用状況について、利用増加によって生じる問題点などである。このプロジェクトは主な 3 つの領域に分類できる。

- ①遠距離で蓄積された資料へのアクセス、
- ②人間機械相互作用のインパクト、
- ③エレクトロニック・ジャーナルとワード・プロセッサの利用状況の調査。

以上、簡単に CRUS の中から主要と思われる報告の数件を紹介した。

これ以外にも、人文科学を対象にした調査は存在するが一応ここで打ち切り、次節で考察を試みたいと思う。

VI. 考 察

ここで、これまでの調査結果から先に提起した仮説の実証ができるかどうか、その証拠は日本の人文科学者にもあてはまるものかどうかについて考えてみたいと思う。

今回の論文の目的はこれまでの人文科学研究者を対象にした user study や citation study をまとめ、分析し、何らかの結果を統合することであった。主題が広い範囲に分散することを避けるために、5 つの仮説を予め立て、かなりの量の論文からの焦点をそれらに絞った。

仮説の第 1 は、人文科学者はよく図書館を利用するという仮説である。これは多くの調査で指摘されている。図書の利用、書評の利用の高いことからこの仮説はか

なり実証できたように思われる。但し、全体的傾向はこの仮説を支持しているかもしれないが、人文科学者の図書館の満足度とは別問題であることを忘れてはならない。次回の日本の調査との比較が興味深い結果をもたらすと期待できる。

第2は人文科学者は情報探索を委託しながらないという仮説である。これは特にCRUSで取り上げているが、これもそういえる結果が出ていると見てよいであろう。その理由についてもCRUSは議論のところで言及している。その責任の多くが図書館側にあることは今後の問題として提起されるであろう。

第3の仮説は「見えざる大学」の不在である。確かに仲間に相談したり、外部との個人的接触も少ない。Steigの調査¹⁸⁾でははっきりその不在を確認している。ところが彼女の論文の脚注にきわめて興味深い注釈がつけられている。それによるとBath大学の調査¹⁹⁾ではOxbridge大学の社会科学者は他大学の社会科学者よりもインフォーマルなネットワークに頼っているということが明らかに示されている。彼女の調査でも25の大学院をもつ大学の歴史研究者は他の大学の歴史研究者より頻繁に仲間との討論を行っていたが、しかしこれを裏付ける証拠はないと述べている。しかし、その他の調査、例えばCRUSのNo.2²⁰⁾の結果からもその存在をうかがわせる結果がでており、自然科学の研究者ほど明確な形をとらないまでも、全くないとは言いがたいように思われる。CRUSのNo.3のJohn CapmanはBirmingham大学の教員が情報入手にかなり「見えざる大学」を頼っていることを指摘している。

第4の仮説は人文科学者が二次資料を使わないことである。これは興味深い結果をいずれの調査も出している。総合すると、抄録・索引は余り使わず、書評をよく使う傾向が強いといえよう。使わない理由は知らないことと、二次資料の不充分さにあると思われる。この分野は知ってもらうための努力と二次資料の充実という二つの課題を図書館側に提起しているように思われる。抄録・索引とは何かを根本から問い直し、人文科学者自身の積極的参加による改善を期待すべきであろう。

第5の仮説は、今回のレビューからははっきりした結論を導き出せないように思われる。社会科学を調査したINFROSSのレポート⁵⁾でも指摘されたように彼らには研究計画段階というはっきりした過程が存在していない。CRUSの結果は今後の研究の糸口としておおいに役立つであろう。

この5つの仮説の他に新技術と人文科学者の問題がある。これについてはAnnual Review of Information Science and Technology 15巻(1982)でJoseph Rabenがかなり詳しく取りあげている。

さて、非常に簡単に結果からの考察を行った。それは今回の論文の主眼点をレビューにおいたからである。CRUSの最終結果の公表もそう待たずとも入手できるであろうし、新しい試みも期待できるであろう。その後で調査を実施する方が時期として適切ではないだろうか。今では時期尚早であり、特に優れた結果が提示されている今、これ以上はとうてい望めそうもないと判断した。

さて、これらの結果をもとに、日本における人文科学者のuser studyを行うことを考えなければならないが、それは数年先かもしれない。英米とは異なる情報環境の中にある日本の研究者を調査する難しさは山積みされている。それにもかかわらず、やらなければならない。それは利用者を知ることこそ図書館情報学の基盤であり、そこに図書館の未来があると思われるからである。

文献探索には慶応義塾大学図書館・情報学科の森岡智子、竹内比呂也、村主朋英、大学院の杉原寛子諸君に協力していただいた。ここに謝意を表する。

- 1) Schuller, A. L., "Communication in the art and humanities", *Journal of Research Communication Studies*, 3, p.47-63 (1981).
- 2) Bath University Library, Investigation into Information Requirement of the Social Science (INFROSS). Research Report no. 1, no. 2, 1971.
- 3) University of Sheffield, Center for Research on User Studies (CRUS). *occasional paper* no. 2, 1978.
- 4) Bath University Library, The Research project Design of Information systems in the Social Science (DISISS). Research Report Series, B, no. 4, 1975.
- 5) Lois Bebout, Conald Davis, Jr., and Donald Oehlerts, "User studies in the humanities: a survey and proposal", *RQ* no. 15, 1975, p.40-44.
- 6) D. J. de Solla Price, "Citation measures of hard science, technology, and non-science", in *Communication Among Scientists and Engineers*, eds., C. F. Nelson and D. K. Pollock (Lexington, Mass: Heath Lexington Books), 1970, p.3-22.
- 7) Middleswart, L. E., "A Study of book use in the University of Chicago Library". (Master's

- dissrtation, Graduate Library School, University of Chicago, 1975.
- 8) Trueswell, R. W., "A Quantitative measure of user circulation requirements and its possible effect on stack thinning and multiple copy determination", *American Documentation*, vol. 11, no. 24 (1965).
 - 9) Fussler, H. H. and J. L. Sinon, "*Patterns in the use of books in large research libraries*", Chicago, University of Chicago Library, 1969, 144 p.
 - 10) Hutchins, W. J. et al., "*The Language barrier: A study in depth of the place of foreign language materials in the research activity of an academic community*", Sheffield, Eng.: University of Sheffield Postgraduate School of Librarianship and Information Science, 1971, 107 p.
 - 11) Palmour et al., *A study of the characteristic, costs and magnitude of interlibrary loans in academic libraries*. Westport, Conn.: Greenwood Publishing Co., 1972, p. 33-42.
 - 12) Stevens, R. E., "*Characteristics of subject literatures*"(ACRL Monograph, no. 6, Chicago, ACRL), 1953, p. 19.
 - 13) Stevens, R. E., "The use of library materials doctoral reserch: a study of the effects of difference in research method", *Library Quarterly*, vol. 23, p. 34-35 (1953).
 - 14) Hale, B., "*The subject bibliography of the social sciences and humanities*", Oxford, Pargamon Press, 1970, 142 p.
 - 15) Skelton, B., "Scientists and social scientists as information user: a comparison of results of science user studies with the investigation into information requirement of the social science", *Journal of Librarianship*, 5: 147 (April 1973) (邦訳 宮地見記訳「社会科学における情報システムの設計」, (株)紀伊国屋書店, 1974, p. 13)
 - 16) Colyve Jones, Michael Chapman and Pomela Carr Woods, "The characteristics of the literature used by historians", *Journal of Librarianship*, vol. 4 no. 3., 1972, p. 137-156.
 - 17) Earle, P. and B. C. Vickery, "Social science use in the UK as indicated by citations", *Journal of Documentation*, vol. 25, no. 2, p. 121-41 (1969).
 - 18) Stieg, Margaret F., "The information of needs of historians", *College & Research Libraries*, vol. 42, no. 6, 1981, p. 549-560.
 - 19) Dagmar Horna Perman, ed., "*Bibliography and the historian: the conference at Belmont of the Joint Committee on Bibliographical Service to history*", May 1967 (Santa Barbara, Calif.; Washington, D. C.: Clio, 1968)
 - 20) Partrica Stenstrom and Ruth B. McBride, "Serial use by social sciences: a survey", *College & Research Libraries*, Vol. 40, p. 426-31 (1979).
 - 21) Broadus, Robert N., "The literature of the social science: a survey of citation studies", *International Social Science Journal*, vol. 23, p. 236-43 (1972).
 - 22) この文献は入手できなかったが、出典は Arthur Monroe McAnally, "*Characteristics of materials used in research in United States history*" (Ph. D. Dissertation, University of Chicago, 1951.)
 - 23) University of Sheffield, "Center of Research on User Studies (CRUS), *occassional paper* no. 4 1981.
 - 24) Raben, Joseph and Sarth K. Burton, "Information systems and survices in the arts and humanities", *Annual Review of Information Science and Technology*, vol. 15, p. 247-266 (1982).